

こころが動いたとき

『星の降る夜に』

看護師 井内 良子

訪問看護は病気や障害を抱えた人たちが在宅や地域で暮らすお手伝いをする仕事である。数多くの思い出があり紹介したいと思うが、その中で M さんの事を語らずには先に進めない。

まだ訪問看護という仕事に就く前の話であるが、私に地域という事を考えさせてくれ、この仕事に入るきっかけにもなった出会いである。障害を抱えながらも自分らしく地域の中でしっかりと生活されていた姿が忘れられない。

阪神大震災から 3 年ほどたった神戸のクリニックで仕事をしていた時のことである。当時神戸の町はまだ震災の後遺症で心も病んでおられた。身内や知人を亡くされた話を聞き、思わずもらい泣きしたこともあった。そんな中で震災のあと元気になったという M さんがいた。クリニックに時々点滴に来られる足の不自由な 35~6 歳の男性である。こげ茶のマントに杖をつけて魔法使いの様ないでたちで、傍らにはいつも可愛らしい奥さんが付き添っておられた。いつも穏やかな笑顔で丁寧に挨拶される人で近所で喫茶店をしているという。M さんは若いころは大変な旅行家でインドやチベットを旅してきたという。そんな M さんがうつ病に倒れた。詳しい経過は聞けなかったがひどい状態でついに飛び降り自殺を図ってしまう。意識不明で死線をさまよったがなんとか命は取り留めた。

しかし両足に重い障害が残り、歩くことはおろか立つことも難しいと言われた。奥さんの必死の看病にも答えずトロトロ眠っている日が続いていた。そして震災が襲った。病院は戦場のようになり奥さんは恐怖で口もきけないありさまだった。M さんは目覚めた。「自分が妻を守らねばならない」と思いその後奇跡の回復を遂げる。震災のあと風呂にも入れず困っていた人達のため車椅子に乗って自衛隊に交渉に行き、テントの中に入浴場を作ってもらった。不自由な体で先頭に立ち毎日のように役所に通い、散らばっていた近所の人をまとめて町内の片付けや復興に協力した。

こうしているうちに M さんに喫茶店をやってみないかという話が持ち上がった。もともと大のコーヒー好きでこだわりのあった M さんはコーヒーの入れ方を学び、コーヒーに合うケーキを探した。あくまで主役はコーヒーなのでケーキはでしゃばらず引き立て役に徹するべしという。神戸中を探し回ってイメージどおりのシフォンケーキを見つけてきた。それから血のにじむようなリハビリが始まった。水の入れたグラスをお盆に載せてこぼさずにお客に運ぶ練習である。こうして一個だけグラスを運べるようになると奥さんと二人で念願の店を開けた。M さんは言う。「一番良いリハビリは仕事をすることです」。店のメ

ニューはコーヒーと紅茶とシフォンケーキだけである。客の顔を見てから豆を挽き入れてくれるコーヒーは香りが高く近所で評判になった。M さんの人柄に引かれ世代を問わず客が集まり小さなサロンのようになった。ダンディーな M さんはひよこのアップリケのついた洒落たチョッキを着こんで、夜遅く来てくれる常連を待つためいつも遅くまで店を開けていた。11 月の中頃、点滴に来た M さんは言った。「流れ星がきれいですね。昨日も寒いのに空を見てたらふたつも見えました。20 日は僕の誕生日なんでちょっと早仕舞いしようと思っています」。

しし座流星群が飛来し毎晩流れ星を数えられる頃だった。誕生日は早仕舞いして家に帰った。ワインで祝う事になり奥さんが夜の町に買いに出かけた。ワインを抱えて戻ってくると M さんはベッドで眠りこんでいた。そして奥さんの呼びかけに再び目覚める事はなかった。急性心不全だったという。

一人になった奥さんは涙をこらえて M さんの店を守った。